

リニアバレー構想 ～信州・日本の伊那谷から世界の INA Valley へ～

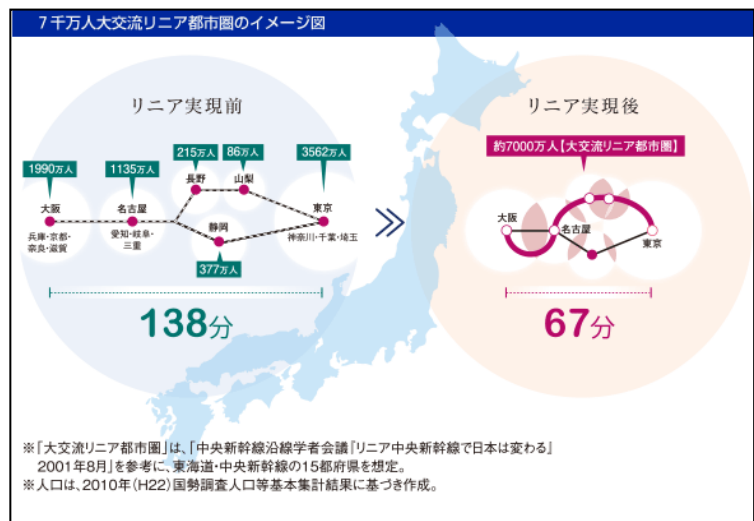
リニア中央新幹線整備を
地域振興に活かす伊那谷自治体会議

1 はじめに

➤ リニアが伊那谷にもたらすもの

○リニア中央新幹線は、その超高速性により国土構造の変革をもたらす国家的見地に立ったプロジェクトである。この新幹線により、三大都市圏がそれぞれの特徴を發揮しつつ一体化し、世界最大のスーパー・メガリージョンが形成されることになり、4つの国際空港、2つの国際戦略港湾を共有した、世界から人・モノ・カネ・情報を引き付け、世界を先導していく地域に変貌する可能性が生まれる。

《スーパー・メガリージョンの形成》



(出典) リニア中央新幹線建設促進期成同盟会ホームページ

○リニア中央新幹線により三大都市圏の主要拠点が約1時間で結ばれることを受け、長野県が大都市圏と同一の交通圏に含まれることとなる。
さらには、人の移動といった輸送面のみならず、都市圏との新たな人の流れが創出されることにより、飛躍的に知の集積も進むことになり、産業・研究・人材育成など各分野の構造に大きなインパクトを与える。

《ナレッジ・リンクの形成》



(出典) 国土のグランドデザイン2050

《高度な都市空間と大自然に囲まれた空間が
近接した新しいライフスタイルが実現》

○リニア長野県駅の活用により、これまで都会から短時間でのアクセスが困難だった地域への人の流れを生み出し、優れた景観や自然環境との日常的な触れ合いを可能にするなど、高度な都市空間と大自然に囲まれた空間が近接した新しいライフスタイルが実現する。



《本州中央部広域交流圏のイメージ》

○リニア中央新幹線と北陸新幹線、並びに高速道路網の整備により、東日本と西日本、太平洋と日本海を結ぶ「本州中央部広域交流圏」が本県を中心に構築され、それが災害に強い国土づくり、田舎暮らしの促進による地方への人の流れの創出につながる。
また、東京一極集中からの脱却にも寄与できる。

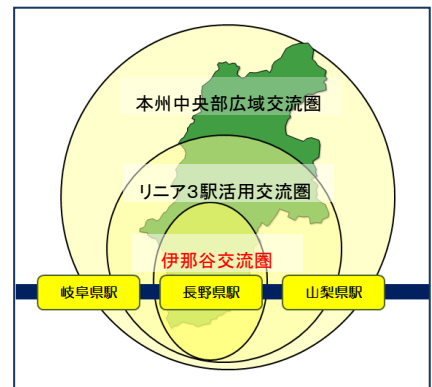


(出典) 長野県新総合交通ビジョン

➤ 長野県リニア活用基本構想との関係

「長野県リニア活用基本構想」では、右図に示した3つの重層的な交流圏を構築することによって、交流人口の拡大などリニアの整備効果を最大限に発揮させていくことを想定している。

リニアバレー構想は、リニア長野県駅の駅勢圏である「伊那谷交流圏」を今後どのように形成していくかの指針となるものである。



(出典) 長野県リニア活用基本構想

2 リニアバレー構想が目指す姿

平成 39 年にリニア中央新幹線の間際駅が伊那谷に設置される。

この地域が、リニアの整備効果を最大限に活用して、地域発展の原動力とすることで、身近になる大都市や世界の活力を引き寄せ、豊かな自然環境の中で地域も人々も輝く「リニアバレー」を実現する。

- I 国際空港へ1時間でアクセスするグローバル活動拠点
～世界とつながる～
- II 巨大災害時のバックアップと食料・エネルギーの新しい供給拠点
～日本を支える～
- III 高度な都市空間と大自然とが近接した「対流促進圏域」
～ここで豊かに暮らす～
- IV 世界から人を呼び込む感動フィールド
～ここでふれあう～

I 国際空港へ1時間でアクセスするグローバル活動拠点 ～世界とつながる～

○首都圏と中京圏との中間に位置することに加え、アジアや欧米諸国の主要都市への玄関口である東京国際空港や中部国際空港へのアクセスが1時間程度となる。伊那谷では、特に東京国際空港へ東京近郊感覚でアクセスが可能となることや、恵まれた自然環境と高い精密加工技術を有する企業集積があることなどの特徴を踏まえ、外資系企業やグローバル経済圏で活動する企業の中核機能の受け皿を目指すとともに、既存の産業集積を活かした次世代産業の創出を目指す。

《目指す姿を実現するために》

- ・国際空港への近接性を活かすとともに、創業支援やビジネスマッチングの取り組みを進めることで、外資系企業やグローバル経済圏で活動する企業の本社、研究開発機能などの中核機能の立地を促進する。さらに、リニア中央新幹線の開通に伴うメリットを既存産業の活性化につなげることで、高度な都市生活と豊かな自然環境が共生する新しい企業集積地を目指す。
- ・最先端産業や地場産業の支援機能、大学連携組織、高等教育機関などを結集させることにより、産・学・官・地域の人的交流の場、ナレッジスクエアを形成し、「知」と「産業」の集積を進める。また、これらの推進に当たっては、産学官など関係者の連携により、基盤となる事業や中核となる体制づくりについての研究を進め、その成果を発信することで、グローバル活動拠点としての優位性につなげていく。
- ・国際戦略総合特区「アジアNo.1 航空宇宙産業クラスター形成特区」の指定を活かしつつ、アジア最大級の航空宇宙産業集積地である東海地域と伊那谷とのアクセス向上により、技術連携を進め、本県の強みである微細精密加工技術を活用した航空宇宙産業クラスターの形成を促進する。

- ・健康・医療・介護分野への企業の新規参入を促進するとともに、県看護大学や地域の医療機関をはじめとする関係機関等との連携を深め、新たな医療系食品の研究や医療機関からのニーズを反映した医療機器の開発、医療に携わる者の人材育成・確保のための取り組みなどを進めることにより、健康長寿社会を支える産業集積（メディカルバイオクラスター）を目指す。

Ⅱ 巨大災害時のバックアップと食料・エネルギーの新しい供給拠点 ～日本を支える～

- 首都直下地震の発生リスクが高まる中で、首都圏と中京圏の中間に位置し、かつ大都市圏との移動時間が短いという地の利を活かして、都市機能や政府系研究機関の移転、企業の中枢機能のバックアップ施設や災害発生時の食料供給・医療提供の拠点の受け皿などにより、日本を支える役割を目指す。
- 農産物の付加価値を高めるアグリビジネスの推進や森林資源の活用など、伊那谷の多様な資源を活用することにより、食料やエネルギーなどの新しい供給拠点をを目指す。

《目指す姿を実現するために》

- ・優良な農業環境や豊富な水資源を有し、内陸県であって津波の被害を受けないなど災害に対して強みを有している伊那谷の特性を十分に検証することで、首都直下地震発生時に日本を支えリスク分散を図る地域として強くアピールし、研究機関や企業の本社機能など都市機能の移転を促進する。なお、これらの推進に当たっては、関係機関で先進事例の研究や課題の整理などを行い、災害時のバックアップ拠点として、都市部から求められる地域像について検討する。
- ・巨大災害発生により首都圏にある本社機能が被災しても円滑に事業活動が継続できるよう、企業経営者の居住地等を整備する。
- ・地域医療の体制・連携を更に充実させることにより、発災時の後方医療支援拠点、災害活動拠点としての機能整備を図る。
- ・県の道路ネットワーク構想を補完する形で市町村道等の道路網構想を策定し、日常の道路交通の確保を図るとともに、災害時の緊急輸送ルート確保のための道路整備や橋梁の耐震補強に取り組む。また、土砂災害対策など、圏域をあげての防災力向上に取り組む。
- ・伊那谷に位置する大学等の知的財産を活用した産学官連携による、農畜産業、食品産業及び関連産業を活性化するための取り組み（アグライノベーション）を進める。また、地域在来の農林産物や食文化の特性を改めて見直し、農産物の新たなブランド化、伊那谷の特産品を活かした6次産業化など付加価値の高いアグリビジネスによって、健康長寿県における食をメインとした伊那谷モデルを構築し地域の魅力を高める。
- ・ヒノキ、アカマツ、カラマツなど伊那谷の多様な樹種を活用できるよう、各機関が連携し、木造住宅の建設を図るための木材の安定供給体制の構築や森林環境保全、木質バイオマスの利活用の推進、森林整備の担い手の確保・育成などに取り組み、林業振興を進める。

Ⅲ 高度な都市空間と大自然とが近接した「対流促進圏域」 ～ここで豊かに暮らす～

○「高度な都市環境の中で働き、大自然に囲まれた環境の中で暮らす」、「平日は大都市圏に住んでいても、週末や一定期間に限って豊かな自然環境の中で伝統文化に触れて暮らす」など、新しいライフスタイルを提供する「対流促進圏域」を形成する。

○伊那谷の伝統文化や自然環境を守るなど、住民が伊那谷で豊かに暮らすための取り組みを進める。

《目指す姿を実現するために》

【移住定住・二地域居住の促進】

- ・都市圏での二地域居住に関する意向調査や他都市の先進地事例の情報収集、新たな生活モデルの提案などについて、広域連合や定住自立圏の枠組みを活用し、研究を進める。
- ・伊那谷を「思考活動・憩い・住居の場」と位置付けた上で、「東京・名古屋への通勤ゾーン」「二地域居住ゾーン」など、様々な居住ニーズに応じた圏域内のゾーニングについて検討を進める。
- ・リニア長野県駅へのアクセス環境に応じて、分譲地の整備や空き家の改修、相談体制の充実など、定住や二地域居住に必要な環境の整備及び各種支援策の検討を進めるとともに、U J I ターン希望者や首都圏の学生などへのきめ細やかな情報提供を行う。
- ・都会で生まれ育った人たちに対し、自然エネルギーの活用によるエコロジーに着目した生活スタイルやクラインガルテンでのお試し居住を提案していくなど、定住につながる取り組みの充実を図る。

【豊かに暮らすための地域づくり】

- ・我が国を代表する伊那谷の伝統文化の保存と継承に向けた活動を進め、郷土意識の醸成や担い手の育成・確保に努めるとともに、誇りある資産として地域の活性化に活かしていく。
- ・特色ある食文化を背景とした健康長寿に向けた取組、子育てしやすく、子どもたちの希望がかなう教育環境の整備、地域の子どもたちへの郷土愛の醸成など、様々な視点から伊那谷に住む人が豊かに暮らすための地域づくりを推進し、新たな文化の創造につなげる。
- ・これらの取組を通じ、将来的に伊那谷を支える人材を育てるとともに、若者を引き付ける魅力ある地域を目指す。

【魅力ある自然環境の保全と景観の形成】

- ・南アルプスの世界遺産への登録や中央アルプスのジオパーク認定に向けての取組、中央アルプス県立公園の国定公園への格上げに向けた研究などを通じ、アルプスや里山の山並み、段丘や田園風景など伊那谷の美しく雄大な自然環境を守り、地域の宝として育て活かしていく。
- ・恵まれた自然や先人により育まれた歴史・文化が織りなす町並みなど、伊那谷地域が誇る美しく豊かな景観を守り継承するとともに、リニア整備を契機として新たに創り出される景観が魅力あるものとなるよう、広域的な看板デザインのルール化や屋外広告物の規制にも取り組み、調和の取れた景観の形成を目指す。

Ⅳ 世界から人を呼び込む感動フィールド ～ここでふれあう～

○南アルプス、中央アルプスといった山岳高原や多彩な伝統文化を活かして、美しい信州の原風景や文化にふれあうなど、インバウンドも含めた広域観光の推進により交流人口が拡大する感動のフィールドを目指す。

《目指す姿を実現するために》

【広域観光ルートづくり】

- ・自治体、観光協会、観光関係団体、旅行事業者等で構成する協議会等を設置し、木曾路をはじめ他の観光地と結んだ旅の提案や北陸新幹線との連携など、広域的な信州の旅を満喫できるよう、日本アルプスの玄関口としての役割が期待されるリニア長野県駅を拠点とした多様な観光ルートづくりに取り組む。
- ・交通事業者と連携し、リニア長野県駅からの二次交通の確保・整備を進める。

【体験型観光の推進】

- ・観光協会や民間事業者等と連携し観光資源の掘り起こしを進め、豊かな里山資源を活用した山菜・きのこ狩り体験や農業体験、田舎暮らし体験、登山・山岳散策をはじめとするアウトドアスポーツなど、魅力ある多様な体験ツーリズムを確立する。
- ・健康志向の高まりの中で、豊かな自然環境、温泉、農産物を活かし、健康に関心を持つ多くの方に訪れていただくよう、ヘルスツーリズムを推進する。
- ・全国に先駆けて実施した、生活文化を活かした体験修学旅行を更に発展させ、フィールドスタディの誘致を促進する。
- ・コーディネーターなどの担い手の育成や効果的な情報発信のあり方など、体制整備について検討する。

【外国人旅行者の誘客】

- ・マーケティング調査によるトレンドの把握等を通じ、伊那谷の伝統・文化を活かした観光資源を磨き上げ、観光地や宿泊施設の魅力向上、滞在プログラムづくりなど、外国人旅行者に対する訴求性を持った観光ルートの形成に地域をあげて取り組む。また、海外へのプロモーションについても検討する。
- ・外国人旅行者が安心して快適に移動・滞在することができるよう、観光情報の一元化や情報発信に向けた広域的な連携を進めるとともに、案内標識やパンフレット等の多言語化、公衆無線 LAN 環境の整備など、得たい情報へのアクセスが容易になるような仕組みを検討する。

【豊かな自然と実績を活かした国際交流】

- ・独立行政法人国際協力機構・青年海外協力隊訓練所を拠点としたグローバル人材の育成、在日大使館との連携を進めるとともに、国の内外から様々な会議を誘致するなど、豊かな自然環境や伝統文化を活かした国際交流を推進する。
- ・リニア時代に地域の主役となる子どもたちへの国際理解教育や語学教育を進める。

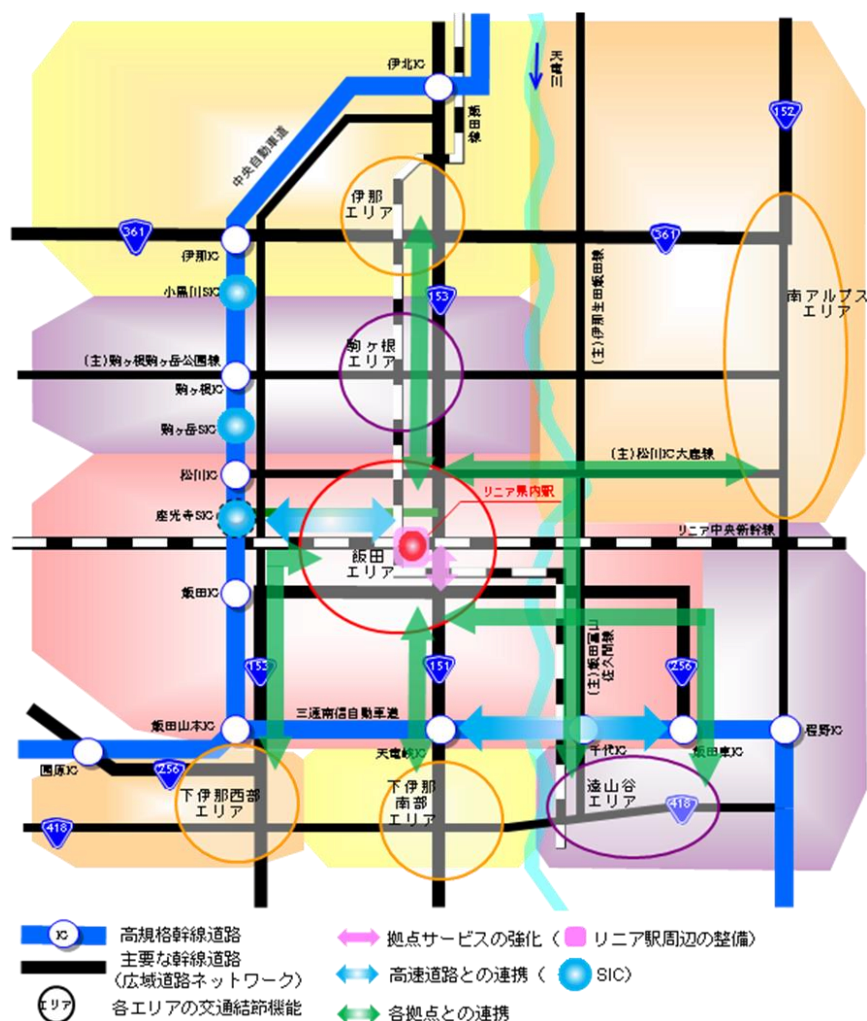
3 構想実現のための基盤整備

- リニアバレー構想の実現に向け、長野県の南の玄関口となるリニア長野県駅を多くの人々にとって利用しやすい駅とするため、県内外の広範な地域からの多様で良好なアクセスを確保する。
- こうした整備を進めることで、伊那谷の人口のおよそ85%が東京圏90分圏域、60%が名古屋圏60分圏域となるようにする。

➤ 目指す姿を実現するために

- ・三遠南信自動車道等の整備や高速道路とリニア長野県駅との直結、スマートインターチェンジの設置など、リニア長野県駅と高速道路との連携を強化するとともに、拠点間を円滑に結ぶ幹線道路を整備するなど、伊那谷の広域道路ネットワークを構築する。
- ・リニア長野県駅からの乗換を円滑に進めるため、駅周辺の広場や道路の整備を図るとともに、二次交通の整備など、住民や観光客の利便性向上に向けた取組みを進める。
- ・J R 飯田線への乗換新駅設置の検討や、リニアのダイヤに合わせた在来線運行体系の実現に向けた調整など、リニア長野県駅と J R 飯田線との連携に向けた取組を進める。

《広域ネットワークのイメージ図》



※図は『リニアを活かした「地域づくり勉強会」』検討成果から抜粋

4 検討スケジュール

分野	時期	第1期(～H29)	第2期(H30～34)	第3期(H35～39)	開業以降(H39～)
地域振興	I 国際空港へ1時間でアクセスするグローバル活動拠点	産業振興 産業振興策の検討 ■各自治体の長期計画等に照らした施策の検討・推進 ■関係機関の連携強化	産業の集積と次世代産業の創出 ■伊那谷地域における人的交流の場の創出、「知」・「産業」の集積の推進 ■航空宇宙産業クラスターの形成促進 ■健康長寿社会を支えるメディカルバイオクラスター形成に向けた取組みの推進		リニアを活かした更なる取組み、戦略の検討
	II 巨大災害時のバックアップと食料・エネルギーの新しい供給拠点	機能移転 都市機能・政府機能の移転等に関する検討 ■国への提案・提言 ■関係機関による連携と研究の推進	都市機能・政府機能の移転等の実現 ■巨大災害時のバックアップ拠点の形成促進(居住地、医療、インフラ等) ■日本を支えるエネルギー供給拠点を旨とした取組みの推進(アグリビジネス・森林資源の活用等)		
	III 高度な都市空間と大自然とが近接した「対流促進圏域」	移住定住 環境景観整備 移住定住・二地域居住等に関する検討 ■リニア開業に向けた移住定住に関する施策の検討 ■先進地事例の情報収集 環境保全と景観形成に関する検討 ■関係機関における方向性の確認・調整	移住定住・二地域居住の促進 ■移住地確保、移住促進施策の展開 豊かに暮らすための地域づくり ■各自治体の取組みの推進 環境保全と景観の形成 ■環境保全、景観形成に係る指針の策定	移住定住・二地域居住の促進 ■情報発信(イベント実施・情報提供)、斡旋 調和のとれた景観形成のための取組み	
	IV 世界から人を呼び込む感動フィールド	広域観光 広域交通 広域観光・広域公共交通に関する検討 ■広域観光の方向性・体制の検討 ■各自治体における観光資源の掘起こし ■広域公共交通(二次交通)のあり方 ■交流人口拡大に向けた施策の検討	広域観光ルートづくり ■広域観光ルートの検討 ■二次交通の検討 インバウンドの推進等 ■海外プロモーション・情報発信の方向性 ■体験型観光の検討 ■国際交流施策の推進	総合的な観光施策の推進 ■検討に基づく体制の構築・整備の推進 ■情報発信体制の検討・情報環境(多言語等による案内など)の整備 ■人材育成	
基盤等整備	リニア関連基盤整備(県・関係機関)	アクセス整備	県公表の「リニア道路関連整備」を踏まえ、リニア駅を中心とした道路ネットワークの構築に向けた検討・設計・整備		道路ネットワークの更なる強化
	【参考】 リニア駅周辺整備(飯田市)	駅周辺整備	基本構想	整備計画	リニア駅周辺整備に係る検討・設計・整備

※図中の赤枠は広域的な議論の中で進めていくことが望まれる部分